

外国人の信仰の源とは？（鶴山神父様の報告を受けて）

（カトリック信仰が盛んな国の）外国人にとって、「信仰を持つ」ということは、本当に自然で当たり前のことです。カトリック信仰はそれぞれの家族の間で生まれ、自然な形で受け継がれたものです。「信仰を持つ」ことは自分の人生を支える大きな希望であり、心のよりどころというだけではなく、それ以上に自分の人生そのものであると思っている人がほとんどです。

滞在外国人には大きく分けて二種類あります。一つはトレーニーと呼ばれる就学研修生たちです。彼らはいわゆる出稼ぎ労働者で、現地の家族のために日本で稼ぎたいという人だけではなく、純粋に技術を学び、経験を積みたいという人もいます。留学生と同様に数年間という限られた期間を日本で過ごします。働いていくために基本的な日本語は習得しますが、留学生ほど日本語が流暢ということはありません。基本的に独身者、単身赴任者が多いです。

もう一つは日本人、あるいは別の滞在外国人と結婚し、日本に家族をもって生活している人たちです。彼らの子どもたちは基本的に日本の学校に行き、日本語も堪能です。配偶者をもつ滞在外国人は日本の社会の中で、自分たちのアイデンティティを保ちながらも、柔軟に日本社会に溶け込み、一生懸命に生活しています。

双方ともにカトリック信徒である場合、教会にくることはありますが、前者はあくまでも「仕事の合間」に、「職場が許してくれるならば教会に来られる」という立場です。残念ながら日本語の能力も限界があり、日本語のミサ（特に説教や教会のお知らせ）への理解に限界があります。後者は「家族の理解」を受けて教会に来ます。できるだけ子どもたちに信仰を受け継いでほしいと思っています。教会で侍者や朗読者、あるいはマリア会やヨセフ会に参加して、日本人信徒とともに教会共同体への奉仕をしている人たちもいます。しかし教会活動への参加は、日本人信徒と同様に「家族の理解」が必要不可欠です。

滞在外国人への宣教司牧を担当している者としていつも感じることは彼らの信仰表現です。彼らは自分たちが教会に行きたいという信仰を仕事場でありのままに表現します。「私は日曜日に教会に行きます。だから仕事は休みます。」と胸を張って自分の信仰のために仕事の休みを願い出ます。また「今日は午後、仕事しません。教会でお祈り（の集いが）、あります。」と言って、出勤はしても、教会の活動のために早退を願うことも恥ずかしいこととは思いません。私たち、日本人信徒はいかがですか？

滞日外国人は日本という異文化の中で、また非カトリック国の中で、自分たちが置かれた環境（生活の場である町内会や近所の人々との関係、幼稚園や保育園での交わり、そしてその人の職場）で「キリスト信者」であることを隠さず、ありのままに生きています。それは

「自分が置かれた場」で「社会での宣教」をしています。それは信仰を生きる姿を分かち合い、「私は信仰を持っている」ことに誇りをもって「信仰が私のアイデンティティ」であることに価値を見出しています。それは誰かに神学的な教えを説明するのではなく、自分が信仰に生きることを人生の支えとしていることを証しています。もちろん彼らだけではなく、私たち一人一人は社会へ宣教するために派遣されていることに気づくことが必要です。

日本人信徒の中には「外国人は煩い！」とか「外国人はミサに遅れてくる！」とネガティブなイメージを抱いている人もいるでしょう。しかし就学研修生が職場の許可があった時だけ教会に来られます。仕事が忙しかったり、職場の理解が得られないときはミサに与れません。夜の仕事をしている人たちにとって、日曜日の朝に教会に来ることは簡単なことではありません。家庭を持つ滞日外国人も家族次第です。私たちはそれぞれの背景を理解し合うことも必要です。

私たち日本人信徒は「外国人の信仰の表現は楽しそうでいいわね」と遠巻きに見てしまうかもしれません。しかし滞日外国人から学ぶということは、彼らを羨ましがったり、お客さんとして扱うことではありません。「私たちの小教区は外国人の活動が盛んです！」と嬉しげに話してくださる日本人の信徒の方がいますが、そういう時に限って、日本人は日本人同士だけで活動し、外国人の国籍別に集まり、個々の共同体が自分たちだけで活動している小教区がありました。しかし教会共同体は国籍別の共同体の集合体ではなく、キリストへの信仰のうちに集められた一つの共同体であるべきです。日本には日本の良さがあり、彼らも日本人から学ぶべきことはあります。そして私たち日本人は、彼らの信仰を生きる姿から学ぶべきことがあるでしょう。私たちは教会において共に生きる仲間であることを再認識していきましょう。

具体的今できること（質疑応答に付け加えること）

滞日外国人にとって大変なのは「教会のお知らせ」です。漢字が読めない人がほとんどです。小教区によっては週・月の教会の予定を掲示したり、配布したりしていると思いますが、ここでもう一つ。

- まずは教会の掲示板に「教会のお知らせ」を掲示する。とりあえず、視覚で見えるものがあると彼らは助かります。
- しかし漢字が読めない外国人への配慮として「これ、読める？」「来週の予定、わかった？」と声かけすることで会話が生まれます。また「この漢字、知ってる？」「この活動、手伝ってくれる？」と単に教会のお知らせを知らせるだけでなく、それ以上の交流に繋げることができるかもしれません。

朗読や侍者、教会の活動に招いていく

- 日本語のミサの中で、滞日外国人に「日本語で朗読してもらおう」ことも大きな宣教です。彼らは日本語能力を上達させるだけではなく、その朗読者の練習に付き合い、交流してくれる日本人信徒に心を開きます。また朗読の後で「朗読、上手だったね!」と言われることで大きな自信を得ます。
- それと同様に、英語のミサの中で、日本人が英語で朗読することはしていますか？英語のミサだからと言って、外国人が朗読するべきというわけではありません。英語の発音を気にして、失敗を恐れる必要はないでしょう。外国人に「この発音、なに?」とか「これ、どういう意味?」と尋ねることで、これも交流につながるのではないのでしょうか？

外国語の歌を取り入れていく

- 楽譜にカタカナを記入し、小教区全体で外国語の歌に挑戦することで、滞日外国人は日本の教会が自分たちを受け入れてくれていると感じます。
- 反対に、日本語で（特に漢字で）書かれている日本語の歌の楽譜にルビやローマ字表記があると滞日外国人たちも日本の歌を覚えやすいでしょう。

小教区の保護聖人のお祝い（または担当司祭の霊名の祝日も可）

- 諸外国では小教区のお祝いをいろいろな形でお祝いしている場合が多いです。小教区の保護聖人のお祝いに限ったことではありませんが、何か小教区全体に共通している行事を「各国のやり方でお祝いする」ことで、それぞれの文化を学びあう機会になるかもしれません。もちろん主のご降誕や復活祭を小教区共同体としてお祝いしていると思いますが、教会行事について企画を持ち合うことで、一つの共同体を築いていくことができるかもしれません。